

西行桜

禪竹作

ツレ男 都人

立衆一同 花見の人々

ワキ 西行

狂言 寺男

シテ 桜の精

地は 山城

季は 三月

「頃待ち得たる桜狩。く。山路の春に急がん。

男詞

「かやうに候ふ者は。下京辺に住居仕る者にて候。

さても我春になり候へば。こゝかしこの花をながめ。さながら山野に日を送り候。昨日は東山地主の桜を一見仕りて候。今日は又西山西行の菴室の花。盛なるよし承り及び候ふ程に。花見の人々を伴なひ。唯今西山西行の菴室へと急ぎ候。

一同道行

「百千鳥。囀る春は物毎に。く。あらたまりゆく

日数経て。頃も弥生の空なれや。やよとゞまりて花の友。知るも知らぬも諸共に。誰も花なる心かな。く。

男詞

「急ぎ候ふ程に。是はゝや西行の菴室に着きて候。

暫く皆々御待ち候へ。某案内を申さうずるにて候。如何に案内申し候。

狂言

「誰にて渡り候ふぞ。

男

「さん候是は都方の者にて候ふが。此御菴室の花。

盛なる由承り及び。遙々是まで参りて候。そと御
見せ候へ。

狂言

「易き間の御事にて候へども。禁制にて候ふさりな
がら。御機嫌を見てそと申して見うずるにて候。
暫く御待ち候へ。

男

「心得申し候。

ワキサシ

「夫れ春の花は上求本来の梢に顕はれ。秋の月下化
冥暗の水に宿る。誰か知る行く水に。三伏の夏も

なく。澗底の松の風。一声の秋を催す事。草木国
土おのづから。見仏聞法の結縁たり。

詞

「さりながら四つの時にも勝れたるは花実の折なる
べし。あらおもしろや候。

狂言

「日本一の御機嫌にて候ふやがて申さう。如何に申
し候。都より此御庭の花を見たき由申して。是ま
で皆々御出でにて候。

ワキ詞

「何と都よりと申して。此菴室の花をながめん為め

に。是まで皆々来り給ふと申すか。

狂言「さん候。

ワキ「およそ洛陽の花盛。何処もと云ひながら。西行が菴室の花。花も一木我も独りと見る物を。花故ありかを知られん事いかゞなれども。是まで遙々来りたる志を。見せでは如何で帰すべき。あの柴垣の戸を開き内へ入れ候へ。

狂言「畏つて候。如何に方々へ申し候。よき御機嫌に申

して候へば。見せ申せとの御事にて候ふ程に。急いで此方へ御出で候へ。

男詞「心得申し候。

花見一同「桜花咲きにけらしな足引の。山のかひより見えしまゝ。此木の本に立ち寄れば。

ワキ「我は又心ことなる花の本に。飛花落葉を観じつゝ。独り心を澄ます処に。

一同「貴賤群集の色々に。心の花も盛んにて。

ワキ 「昔の春に帰る有様。

一同 「隠れ所の山といへども。

ワキ 「さながら花の。

一同 「都なれば。

地 「捨人も。花には何と隠家の。く。所は嵯峨の奥

なれども。春に訪はれて山までも。浮世のさがに
なる物を。実にや捨てゝだに。此世の外はなき物
を。何くか終の住家なる。く。

ワキ 詞

「如何に面々。是まで遙々来り給ふ志。かへすぐ
も優しうこそ候へさりながら。捨てゝ住む世の友
としては。花独りなる木の本に。身には待たれぬ花
の友。少し心の外なれば。花見んと群れつゝ人の
来るのみぞ。あたら桜のとがには有りける。

地

「あたら桜の陰暮れて。月になる夜の木の本に。家
路忘れて諸共に。今宵は花の下伏して。夜と共に
ながめ明かさん。

シテ
「埋木の人知れぬ身と沈めども。心の花は残りけるぞや。花見んと群れつゝ人の来るのみぞ。あたらしい桜のとがには有りける。

ワキ
「不思議やな朽ちたる花の空木より。白髪の老人顯はれて。西行が歌を詠ずる有様。さも不思議なる仁体なり。

シテ詞
「是は夢中の翁なるが。今の詠歌の心を猶も。尋ねん為めに来りたり。

ワキ
「そもや夢中の翁とは。夢に来れる人なるべし。それに付きて唯今の。詠歌の心を尋ねんとは。歌に不審の有るやらん。

シテ詞
「いや上人の御歌に。何か不審の有るべきなれども。群れつゝ人の来るのみぞ。あたらしい桜のとがには有りける。さて桜のとがは何やらん。

ワキ
「いや是は唯浮世を厭ふ山住なるに。貴賤群集の厭はしき。心を少し詠ずるなり。

シテ詞

「おそれながら此御意こそ。少し不審に候へとよ。

浮世と見るも山と見るも。唯其人の心にあり。非

情無心の草木の。花に浮世のとがはあらじ。

ワキ

「実にく是は理なり。さてくかやうに理をなす。

御身は如何さま花木の精か。

シテ

「誠は花の精なるが。此身も共に老木の桜の。

ワキ

「花物いはぬ草木なれども。

シテ

「とがなき謂れを木綿花の。

ワキ

「影唇を。

シテ

「動かすなり。

地

「恥かしや老木の。花も少なく枝朽ちて。あたら桜

のとがの。なき由を申し開く。花の精にて候ふな

り。およそ心なき草木も。花実の折は忘れめや。

草木国土皆。成仏の御法なるべし。

シテ詞

「有難や上人の御値遇に引かれて。恵の露あまねく。

花檻前に笑んで声いまだ聞かず。鳥林下に鳴いて

涙尽き難し。

地クリ

「夫れ朝に落花を踏んで相伴なつて出づ。夕には飛鳥に随つて一時に歸る。

シテサシ

「九重に咲けども花の八重桜。

地

「幾世の春を重ねらん。

シテ

「然るに花の名高きは。

地

「まづ初花を急ぐなる。近衛殿の糸桜。

クセ

「見渡せば柳桜をこき交せて。都は春の錦燦爛たり。

千本の桜を植ゑ置き。其色を所の名に見する。千

本の花盛。雲路や雪に残るらん。毘沙門堂の花盛。

四王天の栄花も。是にはいかで勝るべき。上なる

黒谷下河原。むかし遍昭僧正の。

シテ

「浮世を厭ひし花頂山。

地

「鷺の御山の花の色。枯れにし鶴の林まで。思ひ知られてあはれなり。清水寺の地主の花。松吹く風の音羽山。こゝは又嵐山。戸無瀬に落つる滝つ波

までも。花は大井河。井関に雪やかゝるらん。

シテ
「すはや数添ふ時の鼓。

地
「後夜の鐘の音響きぞ添ふ。

シテ詞
「あら名残惜しの夜遊やな。惜しむべしく得難き

は時。逢ひ難きは友なるべし。春宵一剋価千金。

花に清香月に陰。春の夜の。
(序の舞)

ワカ
「花の陰より明け初めて。

地
「鐘をも待たぬ別れこそあれ。別れこそあれ。く。

シテ
「待てしばし待てしばし。夜はまだ深きぞ。

地
「白むは花の陰なりけり。よそはまだ小倉の山陰に。

残る夜桜の花の枕の。

シテ
「夢は覚めにけり。

地
「夢は覚めにけり。嵐も雪も散り敷くや。花を踏ん

では同じく惜しむ少年の。春の夜は明けにけりや。

翁さびて跡もなし。く。

